

KANSAI

スポーツの扉

7人制ラグビーチーム「滋賀セブンズ」

滋賀から日本一。そんな目標掲げる7人制ラグビーのクラブチームが誕生し、地域とともに歩み始めた。

チーム名は「滋賀セブンズ」。10代〜30代の選手15人が所属する。大学生や高校教員など立場は様々だが、ワンチームでラグビーに情熱を注ぐ。

7人制ラグビーの滋賀県選抜がチームの前身だ。滋賀が開催地だった2025年の国民スポーツ大会（国スポ）に向けて時間をかけて強化され、24年の佐賀国スポで5位



練習する滋賀セブンズの選手たち＝いずれも滋賀県草津市

国スポ日本一へ 湖国からトライ



選手たちに話をする林大成さん(左)と井上正幸コーチ

に入り、滋賀国スポでは準優勝の成績を残した。長く本大会にたどり着けない低迷期があった滋賀にとって、それは「快拳」だった。

だが、そこで熱は冷めなかった。立ち上がったのは林大成さん(34)。「日本2位まできている。一過性にせず日本一にチャレンジし、滋賀のラグビーを引っ張っていく存在になりたい」

林さんは7人制ラグビー元日本代表。24年のパリ五輪出場がかかった23年のアジア予選には主将として臨み、優勝に貢献した。滋賀県選抜側から声がかかり、24年からチームの一員になった。

今年2月、県選抜を引き継ぐかたちで滋賀セブンズを創設した。自身は監督兼選手として先頭に立ち、スポンサー集めなどにも奔走する。

練習は週3日。選手の多く

は仕事があるので、平日の練習は夜に行う。7月2日は5人が集まり、照明が照らすグラウンドで汗を流した。

日曜日だった5日は朝から昼まで練習した。選手は12人が参加し、大阪体育大ラグビー部元ヘッドコーチの井上正幸コーチ(51)が見守るなか、平日にはできない連携プレーなどを確かめた。

練習がない日は、それぞれが自主トレーニングに励む。チーム練習をする機会は限られているから、みな真剣なまなざしで、生き生きと楕円球を追う。

京都のラグビーチームに所属していた狭川剛さん(26)は滋賀出身。ふるさとでプレーしていくために、25年に県内企業に転職した。「滋賀に帰ってこられる母体ができ、この年でラグビーが熱くできるのはありがたい」

東谷康平さん(27)は滋賀学園ラグビー部の顧問を務める。滋賀セブンズの選手たちの練習をがんばる姿に影響を受け、今年度から本格的に参加した。「滋賀県のラグビー界のカンフル剤で、地域ラグビーのモデル的存在だと思う」と話す。

少子高齢化に伴う競技人口減少の課題はラグビーも同じで、林さんの視線は未来にも向いている。今年度からは週に1回、地域の小中学生向け

のアカデミーも始めた。コーチは滋賀セブンズの選手が担う。

滋賀セブンズの存在は、県内でプレーする若者たちにも認知されてきた。膳所高ラグビー部の浦添健吾さん(22年)は「林さんは影響力もある。滋賀のラグビーは盛り上がると思う」。

全国的に見て、近畿地方はラグビーが盛んな地域だ。京都や大阪には高校ラグビーの強豪がひしめき、大学や社会人にも長い歴史を誇るチームが多い。しかし滋賀は、全国高校ラグビー大会の最高成績は16強。決して「ラグビーどころ」ではない。

「選手が県外に流出して戻って来ないことが課題」と林さん。「いまの滋賀には日本一をめざせる環境がある。滋賀に戻って来る流れが加速してくれば」と期待する。

チームの目の下の目標は、26年秋の青森国スポでの優勝だ。主将の内藤伸哉さん(30)は玉川高ラグビー部の顧問。25年の滋賀国スポ準優勝の悔しさを知る一人で、「もう一回、日本一をめざそうと意識高くやっている。まず国スポ優勝を果たしたい」と意気込む。

さらにその先も描く。林さんは「日本代表を輩出した」。大きな夢に向かって走り続ける。

(仲程雄平)